

女嫌いの年上旦那様は、
契約妻を溺愛で囲い込む

第一章

駅から徒歩数分、細い路地を入ったところにあるそのカフェは看板が目立たず、店内も外観も撮影禁止という隠れ家的な店だ。コーヒーの香りが漂う店内は薄暗く、静かに読書をする人や抑えた声量で話す客がいる、落ち着いた空間となっている。

暇を見つけてはその店を訪れ、奥のソファ席を定位置としている成沢柑奈^{なるさわかな}は、難しい表情で手元のノートを見つめていた。

柑奈の職業は、漫画家だ。

ノートに書かれているのは漫画のプロットで、作り方は人によってさまざまな方法がある。柑奈の場合はまずノートに思いついたエピソードを箇条書きにしたあと、セリフやストーリーの流れを細かく文章にしていく。

その後、エピソードとセリフを複数の付箋^{ふせん}に書き写し、ノートにペタペタと貼って前後を入れ替えられるようにして流れを整えていた。

（うーん、ちょっとわかりづらいかな。このセリフをあとにして、こっちのシーンを先にしたほうが……）

文章だけではイメージしづらいため、四コマ漫画のように印象的なシーンをラフなタッチで描いてみたものの、なかなかしっくりこない。

月刊女性漫画誌「リール」で連載している柑奈は、今年でデビュー六年目の漫画家だ。十九歳のときにデビューし、等身大の恋愛描写を得意としている。二十歳の頃から四年間連載した『恋じゃないと名前をつけた』という作品が実写ドラマ化し、一躍人気作家となった。

現在は『高野^{たかの}くんは甘い嘘つき』という作品を連載中だが、最近プロットの進捗^{しんちよく}状況がよろしくない。描きたいことは明確なのになかなか納得のいく流れにならず、次第に集中力が途切れてくる。

（ああ、もう。わたし、なんでいつもプロットとネームに時間がかかるんだろ。絵を描くのは速いの）

今の連載を始めて一年ほどになるが、コミックスを出すたびに書店の売り上げランキングは上位で、人気は上々だ。

しかしそれがプレッシャーになり、毎月プロットとネームで四苦八苦していた。自宅では集中できず、こうして近所のカフェでやるのが常だが、長いときは十日ほどかかってしまう。

月刊連載ならプロットを作成して担当編集と内容を擦り合わせるのに三日、ネームといわれる絵コンテを作成するのに四日ほどかけるのが理想的だが、今回はプロットが完成しないまま四日目に突入していた。

担当編集の三門^{みかど}慎平^{しんぺい}からいつ連絡が来てもおかしくない状況にじわじわと焦りがこみ上げるもの

の、進まないものは仕方がない。

ため息をついて氷が溶けかけたアイスコーヒーを一口飲んだ柑奈は、ふと斜め向かいの席に座る男性に目を留めた。

（わ、すごいイケメン。三十五、六歳くらいかな）

黒のタートルネックニットはおそらくカシミア製で、肩幅が広く均整の取れた体形に適度にフィットしている。

グレーのセンタープレスのパンツを合わせたコーディネートは大人の落ち着いた醸^かし出し、磨き上げられた革靴とニットの袖口から見えるハイブランドの腕時計が高級感を感じさせた。

何より目を引くのは、彼の顔立ちだ。涼やかな目元と高い鼻梁^{びりやう}、薄い唇が形作る容貌は目を瞠^{みは}るほど端整で、彫りの深さは外国人と遜色^{そんしよく}なく、店内にいる女性客がチラチラと彼に視線を向けているのがわかる。

しかしそれを知ってか知らずか、当の男性は涼しい顔で脚を組み、外国のものらしき分厚い書籍を読んでいた。伏し目がちなその様子はまるで映画のワンシーンのように絵になり、柑奈の心の中にわかに「描きたい」という欲求が湧く。

（こんなに容姿が整った人を見る機会は、滅多にない。ちょっとスケッチさせてもらおう）
急いでバッグからクロッキー帳を取り出し、それを開いた柑奈は、シャープペンシルでアタリをつける。

「アタリ」とはスケッチをする際、頭の位置や手足の長さを決めるざっくりとした線で、全体のバ

ランスを取るために必要なものだ。ジロジロ見るのは失礼になるため、さりげなさを装いつつ彼に視線を向け、柑奈はしばしスケッチに没頭する。

普段はデッサン用のフィギュアや写真を使って人体を描いているため、こうして生身の人間を前にして描くのはかなり新鮮だ。いざスケッチを始めると、男性の長い手足や均整の取れた身体つきがよくわかり、思いのほか集中してしまう。

しかし八割ほど描いたところでふいにテーブルの上のスマートフォンが振動し始め、ハッと我に返った。ディスプレイに表示されている名前は「三門慎平」となっており、柑奈は担当編集から電話が来ているのがわかって動揺する。

（やばい、プロットがまだできてない。どうしよう）

見知らぬ男性をスケッチしている暇などないのに、つい熱が入ってしまった。

スマートフォンを手にあたふたし、電話に出ようかどうしようか迷ったものの、結局席から立ち上がる。そして店の化粧室に向かって歩き出しながら、電話に出た。

「はい、成沢です」

『お疲れさまです。自宅にかけたけど出なかったので、携帯にかけたんですが。今どこにいるんですか』

「近所のカフェだけど」

いくつか仕事について話し、彼が一時間後に自宅に来るというのを了承して、通話を切る。

プロットはまだ納得のいくクオリティには仕上がっておらず、暗澹^{あんたん}たる気持ちがかみ上げた。三

門に会えば仕事の遅さについて淡々と説教されるのが目に見えているが、実際にできていないのだから甘んじて受けるしかない。

（あと一時間で、できるだけ形にしておこう。スケッチなんてしてる場合じゃない）

そんなふうに考えつつ席に戻った柑奈だったが、ソファに座ろうとしたときに腰が勢いよくテールブルにぶつかってしまった。

その瞬間、筆記用具や先ほどまでスケッチをしていたクロッキー帳がバサバサと床に落ち、派手に散らばる。

「あ……っ」

慌ててしゃがみ込み、床にばらまかれた筆記用具や消しゴムを拾い集める。

ふと目の前に影が差して顔を上げると、斜め向かいに座っていた男性が立ち上がり、クロッキー帳を拾ってくれるところだった。

「あつ、すみません」

「いえ、……」

開いた状態になっていたクロッキー帳に目を留めた彼が、驚いたように目を見開く。

その視線は自身が描かれたスケッチに釘付けになっていて、柑奈は急いで手を伸ばしながら口を開いた。

「あの、これは……っ」

「もしかして、僕をスケッチなさっていたんですか？」

落ち着いた低い声で問いかけられ、ぐっと言葉に詰まる。

（どうしよう、怒ってる？「別にあなたを描いたわけじゃない」って言いたいけど、たぶんバレバレだよね）

グルグルとそう考えたものの、この状況で下手に言い訳をすれば、相手を不快にさせてしまうに違いない。

描かれている服装や顔の造作ぞうぞくから言い逃れは難しく、立ち上がった柑奈は内心冷や汗をかきながら頭を下げた。

「あの……っ、了承を得ずに勝手にスケッチしてしまい、大変申し訳ありません。決して悪気があったわけではないのですが、ご不快な思いをさせたこと、心よりお詫びいたします」

まさか男性に見られるとは思わず、柑奈はひどく動揺していた。

うっかり軽い気持ちでスケッチしてしまったが、無断で観察されて絵に描かれていたのを知った男性は、きつといい気持ちではないだろう。そう思い、柑奈は当該ページに手をかけつつ早口で告げる。

「こちらは今すぐ破棄いたしますので、どうかご安心ください。お詫びにと言ってはなんですが、そちらのテーブルのコーヒーの代金をお支払いしたいのですが、いかがでしょうか」

こうして誰かに“お詫び”をする機会はなかなかなく、この対応で合っているのかどうか不安になった柑奈は、相手の様子をそっと窺うかがう。

すると男性は気分を害した様子もなく、穏やかに言った。

「いえ、そこまでしていただく必要はありません。それにしても、よく描けてますね。もしかして絵を専門にお仕事されている方ですか」

男性の問いかけに、柑奈はしどろもどろに答えた。

「あの……はい」

「こんなにも素晴らしい絵を描けるのですから、やはりプロの方だったのですね」

彼はニッコリ笑い、自身のテーブルを指しながら「よかったら、少しお話ししませんか」と誘ってくる。

柑奈は一瞬迷ったものの、こっそり盗み見をしてスケッチをしたという負い目があるため、断れない。気まずさをおぼえながら遠慮がちに彼のテーブルの椅子に腰を下ろすと、男性が微笑んで口を開いた。

「このお店に来てから、テーブルにノートや付箋を広げて長いこと悩んでいらっしやいましたよね。実はあなたが僕をスケッチしているのは、なんとなく気づいていたんです。人からチラチラと見られることはよくありますが、絵に描かれるのは初めてで、どんな仕上がりなのかと気になっていました」

だからこそクロッキー帳を床に落とした際、すぐに拾いに来てくれたのだとわかり、柑奈は恐縮して答えた。

「勝手なことをして、本当に申し訳ありません。気づいていらっしやったのなら、きつとすぐぐご不快でしたよね」

「不快というより、興味があつたかな。プロの画家でいらつしやるんですか？」

「いえ。わたしは漫画家なんです」

すると彼が眉を上げ、「漫画家……」とつぶやく。

男性に聞かれるがまま、柑奈は自分が十代後半から二十代をターゲットにした月刊女性漫画誌で連載をしていること、自宅ではプロットとネームがはかどらないため、こうしてカフェに来て作業をしていることを説明した。

それを聞いた男性は「なるほど」と言い、言葉を続けた。

「漫画家さんだからこそ、絵が上手いんですね。しかもあんな短時間で、よく特徴を捉えている」

「本業の画家ほどは上手くはないですし、そんなにお褒めいただくと恐縮です。あの、先ほど申し上げましたが、やはり今日のコーヒー代はわたしに支払わせていただけませんか？ 失礼なことをしてしまったので」

「そこまでのお気遣いは必要ありませんよ。たいして迷惑はかけられていないわけですし」

「そういうわけにはいきません」

柑奈が食い下がったところ、彼は少し考えて「じゃあ」とこちらを見る。

「次にまたこのお店で会ったとき、話し相手になっていただくといいのはいかがですか」

「えっ？」

「普段馴染みのない職業の方のお話は、非常に興味深いので。僕はこのお店に通い始めて半月ほどなのですが、ほぼ毎日休憩がてら午後三時頃に来ていますから、お会いする機会は多いと思

ます」

男性の態度に嫌な感じはまったくなく、柑奈は戸惑いつつも「はい」と了承した。

その日はそれで話を切り上げ、担当編集者との打ち合わせのために自宅に戻った。歩きながら改めて男性のことを思い出した柑奈は、「恰好いい人だったな」と考える。

（すぐくジェントルだったし、あんな漫画に出てくるような人が実際にいるんだ。話し相手になつてほしいって言つてたけど、本気で言ってる？）

そんなことを考えながら翌日の午後にまた例のカフェに向かうと、そこにはあの男性がいた。

彼はこちらに気づき、微笑んで口を開く。

「こんにちは」

「こんにちは。あの、昨日は大変失礼いたしました」

「いえ、お気になさらず。先にお仕事をされますか？ 手が空いたり、休憩がしたくなったら声をかけてください。それまで邪魔しませんから」

男性の言葉に甘えた柑奈は彼の隣のテーブルに座り、ノートや筆記用具を取り出すと、しばしプロット作業に没頭する。

そして付箋を貼ったノートの写真を撮つて三門に送り、そつと視線を上げたところ、男性と目が合った。彼は自身のテーブルの脇に置かれたメニューを手に取り、こちらに示して言う。

「よかったら、甘いものをご一緒しませんか？ 男一人で頼むのは気が引けて、おつきあいただけるとうれしいです」

「あつ、はい」

こちら甘いものは好きのため、断る理由はない。

メニューには秋らしいスイーツがいくつかあり、柑奈はいちじくのタルトを、男性は和栗のモンブランを注文した。スタッフが去っていったあと、彼が読みかけの本をしまいながら問いかけてくる。

「お仕事ははかどりましたか？」

「はい。昨日、担当編集と打ち合わせをして大まかな流れを決めて、今ようやくプロットが完成したところです。提出したものにOKが出れば、これから三日ほどかけてネームの第一稿を作成することになります」

「ネーム……」

「漫画を描く前に作成する、絵コンテのことです。コマ割りをし、大雑把に絵のイメージを描き込んで、セリフも当てます。それが通れば、今度はペン入れ前の下絵を描いていくという流れです」

男性が「なるほど」と興味深そうにつぶやく。

それから二人で、しばし雑談に興じた。

柑奈はその後ネームをやるために三日間カフェに通ったが、そのたびに彼と甘いものを食べながら話をした。店に行けばあの男性に会えると思うと心が浮き立ち、柑奈は思わず微笑む。

（何しろ眼福なイケメンだもんね。それでいて話しやすいし、実は甘いもの好きなのところも可愛いし。最近は仕事というより、あの人に会いに行ってるような感じがするな）

とはいえ彼とどうこうなりたいというわけではなく、会話をする相手として楽しただけだ。

それに加え、端正な容姿を前にと創作に対するイメージが刺さる、いい影響を受けている気がする。作業が以前に比べて速くなっているのは、きつと気のせいではないはずだ。

しかしその日カフェに入った柑奈は、店の奥に進んで目を瞠った。いつも一人で本を読んでいる男性だが、今日は女性が一緒にいる。

二十代後半に見えるその女性はコンサバ系のファッションで、彼の向かいに座って何やら熱心に話しかけていた。しかし男性のほうは、今まで見たこともないほど淡々とした表情だ。席に近づくにつれて会話が断片的に聞こえてくる。

「今の僕は休憩中、いわばプライベートな時間です。こうして来られても、特別あなたとお話することはありません。むしろパーソナルな部分に無遠慮に踏み込まれて、非常に不愉快です。どうかお引き取りください」

「こうでもしなければ、羽芝さんは個人的にお話ししてくださいじゃないですか。確かに会社からあとをつけてきたのは褒められることではないですし、お詫びいたします。でも、決して気分を害するつもりは……」

「何度も同じことを話すのも、時間の無駄です。お引き取りを」

にべもない男性の態度に、女性はぐっと言葉に詰まったあと、荒い動作で席を立つ。

そして顔を歪めながらうつむきがちに店の出入口に向かって歩き出し、柑奈の脇を足早にすり抜けていった。

(まずい状況で来ちゃったかな。機嫌が悪いなら、話しかけないほうがいいのかも)

そう考え、少し離れた席に座ろうとした柑奈だったが、その瞬間彼がふとこちらを見る。

そしてたった今、女性に対して冷淡な態度を取っていたのが嘘のように柔らかな微笑みを浮かべ、声をかけてきた。

「こんにちは。隣のテーブルが空いてますから、どうぞ座ってください」

「あ、はい」

断るタイミングを逃した柑奈は、遠慮がちに隣のテーブルに座る。

そしてオーダーを取りに来たスタッフにロイヤルミルクティーを注文し、彼に向かって言った。

「あの、今までわたし、ご不快な思いをさせていませんでしたか？ もしお一人で過ごしたいのに邪魔していたのなら、本当にすみません」

すると男性がかすかに眉を上げ、苦笑して口を開く。

「さっきの会話が、聞こえてしまったんですね。彼女は僕の仕事の取引先の人間なのですが、商談のたびに飲みや食事に誘ってくるので、毎回はつきり断っていました。すると彼女は商談後に休憩に入った僕のとをつき、このカフェに入って声をかけてきたんです」

このカフェは駅とは逆方向で、しかも細い路地の先というわかりづらい位置にあり、偶然とは思えない。そのため、プライベートに踏み込まれるのが嫌な彼は、にべもない態度を取ったらしい。

男性は「でも」と続け、ニツコリ笑って言った。

「あなたとお話していて不快な思いをしたことは一度もありませんから、どうかご心配なく」

「そうですか」

そう言われてホッとする反面、先ほどとはあまりにも態度が違うことに、柑奈は戸惑いをおぼえる。

(この人はすごいイケメンだから、今まで同じようなことが何度もあったのかも。確かに断っているのにしつこく付き纏^{まと}われたら嫌だろうし、それが重なればうんざりもするだろうけど、こんなにも態度が違うんだ)

柑奈自身は彼に対して特別扱いされる何かをしたおぼえはないが、冷たい態度を取られないことに安堵した。

その後しばらくネームの作業をし、一段落したところで雑談に興じる。柑奈が「近頃の悩みは、男性を色っぽく描けないことだ」と語ったところ、男性が眉を上げて問い返してきた。

「色っぽく、ですか？」

「はい。作品の読者層は十代後半から二十代の女性なのですが、その年代の女性にとって魅力ある男性を描くことが重要になります。それはビジュアルと内面の両方なんですけど、たぶんわたしが久しく恋愛していないせいで男性キャラクターの色気が出ていないんじゃないかと先日担当編集に言われました」

胸がきゅんとするような恋愛漫画を描いていながらも、実際の自分は汚部屋^{おべや}暮らしで長いこと恋人もいない、いわゆる「干物女子」だ。

おそらく日常の中にとときめきがないせいだと柑奈が語ったところ、彼が少し考えてからつぶや

いた。

「ときめきとは、たとえばこういうことですか」

「えっ」

ふいに男性が隣から腕を伸ばし、柑奈の手をつかんでくる。そしてそのままやりと力を込められ、思わずかあっと頬が赤らんだ。彼の手は大きく、指は長く繊細で、男性的な美しい形をしている。

自分より若干高い体温をダイレクトに感じ、息を詰めて男性の顔を見つめると、彼は微笑みでぐに手を離れた。

「ただの知り合いだと思っていた男性から、突然手を握られる。ときめきとは、こんな感じですかね」

「そ、そうですね……」

突然の接触に心拍数が上がり、柑奈は自由になった自身の手をぎゅっと握る。

予想外の展開に、どういう反応をいいかわからなかった。しかし当の男性は涼しい顔で、「ああ、そうだ」と言ってジャケットの胸ポケットに手を入れる。

「もう何度もお会いしているのに、素性を明かさないのは失礼ですよ。これが僕の名刺です」差し出された名刺を受け取り、柑奈はそれを眺めながらつぶやく。

「株式会社エヴァライズ・インベストメンツ 代表取締役社長 ……経営者なんですか？」

「はい。主にIT関連のスタートアップやバイオベンチャー、AI分野、エネルギー関連に投資し

ている会社です」

記載されている名前は、『羽芝詠一』^{えいいち}となっている。それを見た柑奈も、バッグから自分の名刺を出して差し出した。

「わたしは成沢柑奈といいます。すみません、名刺は仕事用のしか作ってなくて、ペンネームなんですけど」

名刺には『漫画家 成沢りりか』と書かれており、仕事用のメールアドレスと、ポートフォリオとなるページにアクセスするための二次元コードが記載されている。

それを見た彼——羽芝が、感心したように言う。

「ペンネームですか。クリエイティブなお仕事の人ならではですね」

その後、羽芝はこれまで話さなかった自身のことを語り始める。

聞けば年齢は三十六歳で、起業して七年になるらしい。自宅とオフィスはここから五分ほど歩いたところであり、午後に休憩を兼ねてこの店でコーヒーを飲むのが日課だという。

会社経営者だと知った柑奈は驚いたものの、彼には上流階級の人間特有の鷹揚^{おつよう}さと余裕があり、その素性になんとなく納得してしまった。柑奈は改めて彼の名刺を眺めながら言った。

「わたし、専門学校に通っている十九歳の頃に漫画家としてデビューしたので、普通に社会で働いた経験がないんです。だから正直なところ、ベンチャーとか投資会社とか言われても、どういう仕事内容なのかさっぱりわかりません」

するとそれを聞いた羽芝が、クスリと笑って言う。

「確かに畑違いの仕事の内容は、まったくわかりませんね。僕も漫画を描く過程については門外漢なので、成沢さんに聞くまで知りませんでしたし」

「でも漫画で登場人物が会社員という設定だと、そのキャラクターが働いている業界について調べなければなりません。調べ物で、丸一日潰れることもあります」

「それは大変ですね。もしビジネス関連で知りたいことがあれば、なんでもお答えしますよ」

柑奈が「えっ、いいんですか？」と問いかけると、彼はあっさり頷く。

「もちろん。僕の知っている範囲であれば」

その後、会計を済ませてカフェを出た柑奈は、自宅マンションに向かって歩きながら考える。

（羽芝さん、いい人だな。いかにも仕事ができそうな雰囲気かじみ出てるし、もしハイスぺ感のあるキャラクターを出すことになったら、本当に取材させてもらおう）

出会ってまだ数日だが、彼と話すのは楽しい。

昨今の漫画業界はデジタル化が進み、アシスタントを自宅に呼ばずにメールや電話で指示することが多く、人と話す機会が極端に少ない。柑奈も一人で作業するのが常で、下絵とペン入れが始まると十日以上も自宅にこもりきりになるため、担当編集者以外と直接接することはなかった。

そんな中、行きつけのカフェで羽芝と話す時間は、いい気分転換になっていた。彼は柑奈の仕事の邪魔はせず、一段落したところで十五分ほど話をする。

だがこちらの仕事に踏み込みすぎない気遣いがあり、根掘り葉掘り聞いてこないことに柑奈は安

堵をおぼえていた。

（漫画家だつて聞いたら目の前で作品を検索したり、「ちよつとここで絵を描いてみて」つて言い出したりとか、デリカシーのない人がいるもんね。羽芝さんには、そういうところがない）

しかも羽芝は毎回スイーツをご馳走してくれ、こちらが「支払わせてほしい」と言っても「男が一人でスイーツを食べる恥ずかしさを払拭してくれているんですから、そのお礼ですよ」「どうもお気になさらず」と言つて払わせてくれない。

（でも奢られつ放しは落ち着かないから、近いうちにちゃんとお礼をしよう。その前に、今月の原稿を片づけないと）

それから八日ほどのあいだ、自宅で黙々と下絵を描いた。

ペン入れにはだいたい一週間かけ、描き終わったものからアシスタントにデータを送り、背景の作画をしてもらう。その後、二日ほどかけてスタッフと共に原稿を仕上げ、ようやく入稿する頃には精根尽き果てていた。

担当編集者の三門からデータ受領の連絡が来たのを確認した柑奈は、ぐつたりとデスクに突っ伏す。

（終わった……。今回は作画コストが高くてどうなるかと思つたけど、間に合つてよかったな）

だが三門からのメールには「コミックスの校正作業と表紙カラー、描き下ろし三ページを一週間以内にお願います」という要請があり、げんなりしてしまふ。

このところ自宅にこもりきりで、食事はデリバリーか三門からの差し入れて済ませていたため、

キッチンはその残骸で溢れていた。デスクまわりはもろろのこと、室内はどこを見ても雑然としていて、見るに堪えない有様になっている。

しかもラスト三日ほどは睡眠時間が一日二、三時間で頑張っていたため、本音を言えば今すぐベッドで寝たい。

(……でも)

柑奈の視線は、デスクの片隅に置かれた卓上カレンダーに引き寄せられる。

原稿作業でかれこれ十七日間も缶詰状態になっており、例のカフェに行けていなかった。おそろく羽芝は、突然柑奈が来なくなったことを気にしているに違いない。

それとも会うたびに話をしていたのは単なる暇潰しで、柑奈の不在はさして気に留めていないだろうか。

(ううん、わたしのほうが羽芝さんに会いたいんだ。あの人と話すことは、日常の中でささやかな気晴らしになっていたから)

時刻を見ると午後三時の少し前で、ちょうど彼が来店している時間だ。

ほぼ毎日来店すると言っていたため、行ってみる価値はある。

そう考えた柑奈は、おざなりに身なりを整え、マスクでノーメイクを隠して自宅マンションを出た。

外に出ると街路樹が黄色い葉を落としていて、すっかり秋の景色となっている。空気はひんやりと澄んでいて、いつの間にか季節が進んでいるのを実感した。

柔らかな午後の日差しを浴びた柑奈は、寝不足で頭がぼんやりするのを感じつつ、自宅から八分ほどのところにあるカフェに歩いて向かう。

ドアを開けると、顔馴染みのスタッフが「いらっしやいませ」と声をかけてきた。店内を見回したところ、奥の席に座った羽芝が本を読んでいるのが見える。

(……いた)

柑奈が歩み寄ると、気配に気づいた彼が顔を上げた。そしてこちらの姿を見て、柔和な笑みを浮かべる。

「こんにちは、成沢さん。久しぶりですね」

「こんにちは」

羽芝は相変わらず端正な姿で、それを目の当たりにした柑奈はにわかに自分のよれた恰好が恥ずかしくなった。

(せめてシャワーを浴びてから来ればよかったかな。メイクもしてないし、服も適当で、「身なりに構わない女だ」って呆れられちゃったかも)

前回この店で彼と一緒にいた女性は、服装もメイクも完璧だった。今さらながらに後悔がよぎったものの、ここまで来てしまったからには仕方がない。

そんなこちらを見つめ、彼が手元の本を閉じて問いかけてきた。

「だいぶお疲れの様子ですね。お仕事が忙しかったですか？」

「はい。ペン入れですつと自宅に缶詰になっていて、ついさっき人稿したばかりなんです。あの、

羽芝さんにこれを受け取っていただきたいんですけど」

柑奈がバッグから封筒を出して差し出すと、羽芝が不思議そうな顔をする。

「なんですか？」

「駅前にある“F”という焙煎^{ばいぜん}ショップの、コーヒード豆のチケットです。コーヒードがお好きなようですし、この商品はどれもおすすめなので、よかったら」

差し出したものは、ペン入れ前の最後の外出時に購入しておいたものだ。

いつもこの店でスイーツをご馳走になっているため、何かお返しがしたくて五千円分のチケットを購入した。

柑奈がそう言うと、羽芝が目を瞠^もってつぶやく。

「そんなお気遣いいただかなくても、僕が勝手にしていたことなんですから」

「そういうわけにはいきません。お話しするようになって楽しい時間を過ごしているからこそ、片方にばかり負担をかけないようにするのは当然のことだと思います」

すると彼は面映^{おも}ゆそうな表情になり、封筒を受け取る。

「ありがとうございます。コーヒードは自宅によく淹^いれるので、うれしいです」

空腹をおぼえつつ隣のテーブルに着席した柑奈は、メニューを見ながらオーダーを取りに来たスタッフに注文する。

「アボカドと海老^{えび}のコブサラダ、煮込みビーフのデミオムライス、アイスコーヒードをください」

「かしこまりました」

午後三時に頼むには重すぎるメニューから、食事をしていないのを察したらしい羽芝が、同情的な眼差しになって言う。

「こんな時間によくランチだなんて、大変ですね。忙しい時期の漫画家さんは、食事などはどうなさってるんですか」

「だいたいデリバリーです。わたしは独り暮らしなので、原稿が忙しくなってくると何ひとつ家事ができなくて。洗濯物も山になって、キッチンはお弁当のゴミで溢れてますし、自宅は人様にお見せできないほどひどい有様です」

もっとアシスタントを増やせば、原稿にかかる時間を短くできるに違いない。

しかし今まで数人面接してみたものの、技術面や人柄でしっくりくる人はいなかった。現在はデビュー当時からつきあいのある背景担当と仕上げスタッフの二名だけを雇い、あとはできるだけ自分で描くようにしている。

家事も代行業者などを頼めばいいのかもしれないが、なんとなくその気になれないまま今に至っていた。連載は月刊誌一本で、柑奈は二十五日サイクルで仕事を回しているため、一カ月のうち残りの五日間を家事や休養に当てている。しかし今月はコミックスの作業が入っており、休みがない状態でやらなければならない。

そう語った柑奈は、苦笑いして言葉を続けた。

「たとえば生活をサポートしてくれる奥さんみたいな人がいたら、すごく楽だろうなって思うんですけど。気が合って話し相手になってくれて、わたしができない家事をフォローしてもらおう分、

こつちが経済面を担う。そういう、ある意味ギブアンドテイクみたいな関係っていいなと思ったりしますが、そんな都合のいい人はいないですよ。結局全部自分でやるしかないの、たまにしんどくなります」

今日も帰ってから仕事で、再来月には引越す予定もあるため、やることは山積みだ。

ちょうどマンションの契約が更新時期で、「せっかくだから引越そう」と安易に考えて退去する旨を管理会社に伝えたものの、まだ新居は探せていない。

忙しさを不動産屋巡りをするのもままならず、軽い気持ちで引越しを決めたことを後悔している——そう柑奈が話すと、それを聞いた羽芝が少し考え込んだあとつぶやいた。

「なるほど、ギブアンドテイクという考え方はいいですね。双方にメリットがあり、それぞれの役割を果たしながら生活を一緒にするという」

「羽芝さんもそう思われますか？　今は多様性の時代ですし、型どおりの“夫婦”っていう関係じゃなくてもいい気がするんですよ。メリットありきで考えてもいいんじゃないかなって」

すると彼が「確かに」と同意し、柑奈を真つすぐに見つめて問いかけてきた。

「不躰な確認で申し訳ないのですが、成沢さんは現在おつきあいしている方はいないのですよね」

突然の質問に驚きつつ、柑奈は答える。

「えっと……ご存じのとおり、家に引きこもって仕事しかしていないので、そういう人はいないです。でも、それが何か」

「成沢さんは多忙で家事をする暇がなく、生活面のサポートをしてくれる人を求めている。あくま

でもドライに、双方にメリットがあるのが条件で、気が合ってたまに話し相手になつてくれればなおよし——そういうことですね」

「ええ、まあ」

「それ、僕でいかがですか？」

突然告げられた言葉の意味が理解できず、柑奈は面食らって羽芝を見つめる。

「あの、それってどういう……」

ひどく戸惑いながら彼を見つめたところ、羽芝が言葉が続けた。

「僕はある程度時間の融通が利くので、家事全般を担えます。あなたに快適な生活を約束し、なおかつ気が合い、話し相手にもなれる」

「……………」

「さらにうちに転居してきていただければ、引越し先を探す手間が省ける上、家賃や光熱費もタダです。こちらは成沢さんに仕事部屋を兼ねた十二畳の部屋を提供できますし、ドアも施錠できてプライバシーも保たれますから、さほどストレスはかからないと思うのですが、どうでしょう」

彼の発言の意図がわからず、柑奈は睡眠不足の頭で「もしかすると、羽芝は冗談を言っているのだろうか」と考える。

（そうだよ。わたしが「奥さんみたいな人が欲しい」って言ったから、それに乗ってくれているだけかも。この人も冗談を言ったりするんだ）

そんなふうに結論づけ、柑奈は笑って話に乗る。

「じゃあわたしは、頑張つて羽芝さんを養わなきゃ。お金の面は心配しないでください」

「いえ、僕も仕事をしていますから、そうした気遣いは不要です」

「だったらこちらに、何を求めるんですか？ ギブアンドテイクなら、一方だけが負担するのはおかしいですよ」

すると羽芝がニッコリ笑い、事もなげに答える。

「——結婚です」

「えっ？」

「対外的な『妻』になつてもらいたいです。しかし実際はただの同居人で、戸籍に傷をつけてしまふ分、僕が生活にかかるすべてを面倒見させていただけたらと思つています」

まさか結婚が条件だと思わず、柑奈が目丸くすると、彼はその意図を説明する。

「実は僕の父が現在入院中で、余命幾許いくばくもありません。うちは家庭環境が複雑で、その影響で僕は結婚する気になれずにこれまで独身を通してきたのですが、ここに来て父が言うのです。『私のせいで、お前は結婚に夢を抱いていないのではないか』、『お前が孤独に生きていくことを考えると心配でたまらない』と」

「……………」

「母はいわゆる愛人という立場でしたので、家庭がありながら他に女性がいた父の生き方について思うところがありますが、僕を息子として大切にしてくれたことには感謝しています。彼の会社を継がなかった負い目もあり、亡くなる前にせめてひとつくらいは心配事を解消してあげるのが子の

務めではないかと思つているんです」

羽芝は「ですから」と言葉が続けた。

「父が亡くなるまでという契約で、僕と婚姻関係を結びませんか？ 互いにとって不都合がなければそのまま継続してもいいですし、待遇面に関してはきちんと書類にします。あなたは生活のサポートを、僕は妻帯者という肩書を手に入れる。互いにとって大きなメリットのある契約だと思うのですが、いかがでしょうか」

「えっと……」

突然の申し出に面食らいつつ、柑奈は考える。

（何言つてるんだろ、この人。いきなりとんでもない話をしてるけど、まさか本気で言つてるの？）
いくら父親の余命が幾許もないとはいえ、安心させるために偽装結婚をするなど、まったく理解できない。

しかしそう思う一方、ふいに「アリなのでは」という思いが頭をかすめ、柑奈は動きを止めた。自分の家事能力は本当に低く、自宅は汚部屋と言つていい。忙しい時期はもちろん、普段から片づいているとは言いがたく、担当編集者の三門からも「いつ来ても汚い」と苦言を呈されるのが常だ。おまけに引越しの予定が差し迫っているにもかかわらず、転居先の目途は立っていない。原稿作業に入つてしまえば荷造りもできそうになく、土壇場でバタバタするのが目に見えていて、今から胃が痛くなる。

（だったら——）

だったら、羽芝の話に乗ってみるのはどうだろう。柑奈はふとそんな誘惑にかられる。汚い部屋の中で暮らすのは心が荒^{すさ}むため、できれば脱却したい。家事全般を担ってもらえ、しかも引越先として彼の自宅を提供し、なおかつ仕事部屋兼私室を用意してくれるなど破格の待遇だ。

結婚は死期が迫った父親を安心させたいためで、実際はただの同居人というスタンスらしい。ならばこちらにはメリットしかなく、柑奈の気持ちがいじわじわと高揚する。

(それに……)

羽芝と出会ってからというもの、彼と話すことがいい気分転換となり、作業の能率が上がっていたのは確かだ。

同居すれば彼の姿をスケッチすることが可能かもしれず、ハイスぺ男子の暮らしぶりも取材できる。

それは漫画家として非常に魅力的で、考えるだけでわくわくした。柑奈は羽芝を見つめ、慎重に口を開く。

「確認したいんですけど、結婚はあくまでお互いのメリットのためということで間違いないですか？ 期間限定の」

「はい。父が亡くなったら、すみやかに離婚に応じるつもりです。もちろん、そのときに双方継続の意向があれば続けてもいいですし」

「結婚式とかは……」

「必要ないですよ。やるとなると僕の立場的に大規模にならざるを得ませんし、いろいろとうるさい身内がいるので、籍を入れるだけで済ませられたらと思います」

羽芝がふと気づいた顔で、「ああ、でも」と言いながらこちらを見る。

「それだと、成沢さんご家族に失礼かもしれませんね。娘の晴れ姿を見たいと思われるでしょうから、ごく小規模でやりましょうか」

「あつ、いえ。うちの両親は仕事の関係でシンガポールに住んでいて、わざわざ帰国してもらうのも大変ですから、報告せずにいるほうがいいかと思います」

遠くない未来に離婚するなら、結婚したこと自体を黙っていたほうがいい。

そう告げたところ、柑奈がこの提案に前向きだと受けとめたいらしい羽芝が「じゃあ……」とつぶやき、柑奈は慌てて首を横に振る。

「た、たとえばの話ですよ。契約結婚なんて荒唐無稽^{どうとうむけい}で……なんて言っていないか」

「悪くない話では？ 見たところ、成沢さんはかなりのハードワークです。連日デリバリーの食事は味気ないものですが、僕なら毎食きちんとしたものを作ってあげられる。きれいな部屋で仕事をすれば、作業の能率も今よりぐんと上がるのではないですか」

ニコニコ笑ってそう言われ、柑奈の心が揺れる。

ここ数日の寝不足で思考能力は低下している状態であり、そんな状況で重大な決断をするべきではない。そう思うのに、彼の提案があまりにも魅力的で、気持ちが一気に結婚に傾いていくのを止められず、柑奈はグルグルと考える。

（そうだよ。うちの両親は滅多に日本に帰ってこないんだから、結婚も離婚も黙っていけばバレない。引越し先を確保できて、しかも家事と食事つきなんて、わたしにとっては天国だ）

仕事に没頭できる環境はまるで夢のようで、柑奈はドキドキしながら口を開く。

「じゃあ、しましょうか。——結婚」

「いいんですか？」

羽芝が意外そうに眉を上げ、それを見た柑奈は頷いて答える。

「はい。でもわたし、本当にだらしないうから。羽芝さんは引いちゃうかも」

「面倒の見甲斐がありますから、構わないですよ。では早速、婚姻届を出しに行きましょうか」

思いがけずそんなふうに言われ、柑奈は慌てて問いかける。

「えっと、あの、今からですか？」

「善は急げと言うでしょう。成沢さんはこのあともお仕事があるようですし、できることはさっさと片づけたほうがいい」

羽芝がスタッフを呼び、先ほど注文した料理をテイクアウトにできるか問いかけると、「大丈夫ですよ」という答えが返ってくる。

料理を包んでもらうあいだ、彼はスマートフォンで何かを調べていた。そして顔を上げ、こちらを見て言う。

「どうやら婚姻届は、役所に行かなくてもパソコンでダウンロードできるようです。僕の自宅に行ってプリントアウトし、記入して提出しましょう」

「羽芝さんのご自宅は……」

「ここから目と鼻の先です」

スタッフが紙袋に入れた料理を席まで持ってきたため、代金を支払い、店を出る。

羽芝と連れ立って歩きながら、柑奈は胸がドキドキしていた。まさか急にこんな展開になるとは思わず、「本当にこれでいいのだろうか」という不安がよぎる。

（やっぱり少し考えたほうがいいんじゃない？ わたし、今は寝不足で頭がハイになって、冷静じゃないかも）

「あの、羽芝さん、やっぱり……」

「ここです」

口を開きかけた柑奈は、彼が示した建物を見上げ、目を瞠る。

そこは緑の木々に囲まれた、三階建ての高級レジデンスだった。外壁の一部はグレーで、エントランスホールは花崗岩で造られており、重厚で品のある佇まいだ。

オートロックを解除した羽芝が建物の中に足を踏み入れ、柑奈は気後れしながらそのあとに続いた。中は広々としたラウンジと緑が印象的なアトリウムがあり、さながら高級ホテルのようだ。彼がロビーを歩きながら説明した。

「ここはセキュリティが万全で、二重オートロックの他に、敷地内には三十台以上の監視カメラがあり、各戸の玄関と窓には衝撃に反応する防犯センサーがついています。二十四時間の有人管理の他、敷地の周囲には人物検知システムが張り巡らされており、防犯体制が整っているのが入居を決

めた理由です」

「そうですか」

羽芝の住まいは三階にあり、室内に入った柑奈は、その広さに息をのんだ。

(わ、すごい……)

シンプルモダンで洗練されたインテリアの間取りは3LDKで、リビングは三十二畳だという。他に八畳と十畳、十二畳の部屋があり、今回柑奈に提供してくれるのは、これまで客間にしていた十二畳のスペースらしい。

「書斎で婚姻届をプリントアウトしてきますから、ここで少し待っていてください」

「あ、はい」

彼がリビングを出ていき、ソファにぎこちなく腰かけた柑奈は、広すぎるリビングを見つめつつ、落ち着かない気持ちを押し殺す。

彼が真正正銘の富豪なのだと知り、驚きの連続だった。普段身に着けているものや名刺に書かれていた肩書から、金持ちそうな雰囲気は感じ取っていたものの、実際に住まいに入ってみると桁外れの財力の持ち主だとわかる。

(このリビングの家具、イタリアの高級家具ブランドのものだね。飾つてあるアートとかオブジェもすごそうだし、もしかしてわたし、とんでもない人と結婚しようとしている……?)

やはり寝不足の状態で契約結婚に同意したのは、間違いだった。

せめて一旦話を持ち帰り、後日改めて協議するという形にしたほうがいいのは明白だ。

そう結論づけた柑奈は、そわそわと羽芝が消えたドアを見つめる。

(羽芝さん、早く戻ってこないかな。「やっぱり帰ります」って言ったら感じ悪いと思われるかもしれないけど、勢いで決めていい話じゃないよね)

しかし彼はなかなか戻ってこず、ソファに座った柑奈は次第に強い眠気に苛まれる。

この九日間は原稿のペン入れと仕上げに集中していて、最後の三日間は二、三時間しか眠れていない。いつもなら入稿直後は倒れるように眠っていたが、今日はどうしても羽芝に会いたくて無理をして外出していた。

そのせいか瞼が強烈に重く、思考が散漫さんまんとになっていた。必死に意識を保とうとするが眠気は如何いかんともしがたく、柑奈はソファの背もたれに頭を乗せて考えた。

(羽芝さんが戻ってきたら、すぐに起きよう。それまで目を瞑るくらいはいいよね)

この姿勢なら深くは眠れないため、きつとすぐに気配に気づくに違いない。

そう思いつつ瞼を閉じた柑奈は、一気に眠りの世界に引きずり込まれる。ふかふかのソファが心地よさを助長し、自然と身体が横倒しになって座面に寝そべる形になっても目を覚まさなかった。

夕暮れ時の柔らかな陽光が差し込む中、穏やかな寝息を立てながら、柑奈は夢も見ない深い眠りに落ちていた。

* * *

午後三時半という時間帯、だいぶ日は傾き、窓からはオレンジがかかった陽光が差し込んでいる。そんな中、書斎でパソコンを開き、役所のサイトにアクセスして婚姻届をダウンロードした羽芝詠一は、マウスを操作して印刷ボタンをクリックした。

（今はわざわざ役所に書類を取りに行かなくても、こうして自宅でダウンロードできるんだな。しかし、まさか成沢さんと突然結婚する流れになるとは思わなかった）

成沢柑奈は、羽芝が先月から通い始めたカフェで知り合った女性だ。

たまたま近くの席に座った彼女がこちらをこっそりスケッチしており、その出来栄えに感心したことが話をするようになったきつかけだった。

現在二十五歳の成沢は、漫画家だという。テーブルに広げたノートにはいくつも付箋が貼られており、最初は勉強しているのかと思った。

しかし実際はプロット作業だったようで、難しい顔をして悩んでいた様子の彼女がやがてクロツキー帳を広げてこちらをスケッチし始めたのに気づき、羽芝は「絵画関係の人なのかな」と興味を持った。

（それがまさか、漫画家とはな。短時間であんなに特徴を捉えたスケッチができるなんて、すごい画力の持ち主だ）

無断スケッチに関して恐縮し、しきりに「お詫びを」と言う成沢に会話を持ちかけたのは、単なる気まぐれだ。普段接点のない職業の人間が新鮮だったからだだが、彼女と話すのは不思議とストレスがなかった。その理由は、成沢が必要以上にこちらに踏み込もうとしなかったからかもしれない。

これまで会ってきた異性はほぼ例外なく羽芝の容姿や財力に目の色を変え、なんとかこちらに近づこうとしているのが透けて見えた。先日カフェまで後をつけてきた取引先の女性のようなケースは初めてではなく、こちらの都合より自身の欲望を優先する人間にはうんざりだ。

だが成沢は、違う。羽芝の職業や素性に関して根掘り葉掘り聞かず、程よい距離感を持って接してくれるのが心地よくて、だからこそ自分から名刺を渡してしまったに違いない。

（別に自惚^{うぬぼ}れていたわけではないが、俺を男として意識しない若い女性は彼女が初めてだ。経営者だとわかったあとも「ふうん」という感じだったし、きつと相手の地位や金に興味がないんだろ
うな）

漫画家というクリエイティブな職業であるがゆえの感性なのか、彼女は羽芝の前ではいつも自然体だ。

過剰に着飾ることもなく、十七日ぶりに会った今日はノーメイクにマスクのよれよれな姿で驚いた。聞けば原稿作業でずっと缶詰状態だったと言い、かなり根を詰めていたらしい。

成沢は「生活をサポートしてくれる奥さんみたいな人がいたら、すごく楽なのに」という発言をしていて、それを聞いた羽芝はふと考えた。

（俺がその役割を担当し、代わりに彼女に結婚してもらうのはどうだろう。そうすれば父さんを安心させてやれる上、あの連中への牽制^{けんせい}にもなる）

これまではっきりと公言したことはないが、羽芝はかなりの女嫌いだ。

両親の関係や家族の問題のせいで結婚願望がなく、この先もずっと独りでいるのだと思っていた。

父からかけられた言葉には罪悪感が募ったものの、自分の容姿や財産目当ての女性と一緒に暮らすと考えるだけで虫唾^{むじず}が走る。

(でも……)

こちらを男として意識していない成沢となら、ビジネスライクな結婚生活が送れるのではないか。家事能力が極端に低いという彼女に、こちらは快適な生活を保証する。その代わりに「妻帯者」という肩書をもえれば父の願いを叶えることができ、女除けにもなるために一石二鳥だ。

(父さんは既に余命宣告を受けていて、おそらく一年はもたない。だったらそのあいだだけでも結婚してもらえれば、成沢さんにもメリットはあるんじゃないかな)

あくまでも「同居人」というスタンスならば、成沢の心理的負担も少ないに違いない。

そう思い、契約結婚を提案したところ、彼女はひどく面食らったようだった。しかしこちらの説明を聞くうちに徐々に気持ち傾いたようで、結局承諾してくれ、今に至る。

(彼女は寝不足であまり頭が働いてないみたいだったが、逆にチャンスだ。急いで婚姻届に記入してもらい、可能なら提出までしてしまおう)

プリントアウトした婚姻届を手にした羽芝は、書斎を出ようとする。

しかしその瞬間スマートフォンが鳴り、会社の部下からだ気づいて電話に出た。

「はい、羽芝です」

内容は仕事に関することで、デスクの前に戻った羽芝はパソコンを操作して必要なデータにアクセスし、しばし話し込む。

気がつけば十分ほど時間が経過しており、ようやく通話を切って急いでリビングに戻ると、そこで待たせていた成沢はソファですやすやと寝息を立てていた。

(そういえば、「三日ほどともに寝てない」と言ってたっけ。初めて訪れた男の自宅で眠り続けるなんて、ずいぶんと警戒心が低い人だ)

ソファに歩み寄って見つめると、彼女は穏やかな顔をして眠っている。

成沢は小柄で顔立ちは可愛らしく、今日はノーメイクのせいか二十五歳という年齢より若く見えた。

肌はきれいで爪も手入れが行き届いており、服装はカジュアルだがおしゃれで、女性としての美意識を強く感じさせる。

何より魅力的なのは、常識があるところだ。言葉遣いが丁寧で、何度会ってもこちらに過剰な馴れ馴れしさを出さない。

先ほどお礼として焙煎ショップのチケツトを渡してきたのも、一方的に奢られるのをよしとしな価値観が感じられ、好感度が高かった。

人と距離を保つのが上手いのかと思いきや、こんなふうに無防備に寝顔を晒^{さら}すところが危なっかしいが、羽芝は「それは若さゆえかな」と考える。

(疲れているんだろうし、もう少し寝かせてあげようか。起きたら婚姻届に記入してもらって、親睦を深めるために食事に誘うのもいいかもしれない)

自分たちはこれから「夫婦」になるのだから、相互理解を深めることは大切だ。

思いがけず生活が大きく変わる予感に、羽芝の気持ちがいじわりと高揚する。これから成沢とどんな関係を築いていけるか、心躍らせている自分が少し意外だった。

オレンジ色の西日が差し込むリビングは、だいぶ暗くなっている。ソファに座った羽芝は、そのまましばらく成沢の顔を見つめ続けていた。

第二章

十二月に入ると街中のクリスマスムードは加速し、どこに行ってもクリスマスソングが聞こえてくる。

出版業界は年末進行になり、普段よりスケジュールを前倒して進めなければならない忙しい時期だ。

今日からプロット作業に入った柑奈は、自室でデスクに向かい、ノートを開いていた。するとスマートフォンが鳴り、柑奈はディスプレイに“三門慎平”と表示されたそれを手に取って電話に出る。

「はい、成沢です」

『三門です。今日、プロットの打ち合わせでそちらに行こうかと思うんですが、午後一時頃で都合はいかがですか』

柑奈の担当編集者は、男性だ。

月に何度か直接会って打ち合わせをするのが常で、彼はそのたびにこちらの自宅を訪れている。しかし今回は三門に告げなければならないことがあり、柑奈は意を決して口を開いた。

「打ち合わせは何時でもいいんだけど、実はわたし、一昨日引越したの。だから今、新しい住所

をメッセージで送るね」

すると電話の向こうの三門が、驚いたように問いかけてくる。

『引っ越しは一月の予定だと聞いてましたが、どうして急に？ あの部屋を一人で片づけることができたんですか』

「引っ越し業者を使ったから。もし近くまで来て場所がわからなかったら、連絡して。じゃあ」

電話で込み入った話をしたくなかった柑奈は、一方的に通話を切る。

そしてスマートフォンを操作し、新しい住所をメッセージで送って、小さく息をついた。

（会ったらきつと、いろいろ突っ込まれちゃうんだろうな。……覚悟しておかないと）

視線を巡らせると、まだいくつかの段ボールが残った広い室内が目に入る。

柑奈の新しい住まいは、南麻布にある高級レジデンスだ。羽芝詠一から十二畳の客間を私室兼仕事部屋として用意され、二日前に引っ越してきた。

約一週間前の水曜日、柑奈は羽芝から互いのメリットを考慮した期間限定の結婚を提案され、勢いのままそれを承諾した。とはいえ徹夜明けで思考能力が低下していたときで、冷静になるとじわじわと腰が引けてしまい、「やっぱり一旦話を保留してもらおう」と考えていた矢先に彼の家で眠りこけてしまった。

目を覚ますと傍で羽芝がじつとこちらを見つめていて、柑奈は慌てふためいた。そして『今日は一旦帰りたい』『籍を入れるのは、また別の機会に改めて』と申し出たものの、彼はニツコリ笑って言った。

『僕も成沢さんも仕事が忙しいのですから、こういうことはできるときにさっさと済ませてしまっただほうがいいですよ』

『でも……』

『婚姻届をプリントアウトしてきました。記入したあとに僕の会社に寄り、うちの部下に頼んで証人欄に記入してもらったら、すぐに提出しましょう。ああ、それからレストランを予約しておきましたので、親睦を兼ねてディナーでもいかがですか？ 小さいですが、雰囲気がいい店なんです』

立て板に水のごとき話術で押しきられ、婚姻届に記入させられた柑奈は、あれよあれよという間に外に連れ出されて羽芝と一緒にそれを役所に提出した。

そこから結婚生活の諸条件を記した書面にサインし、引っ越しに至るまでは、かなりの急ピッチだった。

ちょうど原稿を入稿した直後だったが決して暇なわけではなく、コミックスの作業がある。

おまけに自宅は修羅場直後で荒れ果てており、すぐに引っ越しのは無理だと思われた。しかし入籍した当日に下見として自宅までやってきた羽芝は、あまりの汚部屋ぶりに若干顔を引き攣らせたものの、『問題ないですよ』と言った。

『仕事道具や他人に触れたくない私物以外は、すべて業者に任せればいいんです。成沢さんは、要るものと捨てるものの選別だけしてください』

彼は『原稿作業に入る前に、引っ越してしまっただほうがいいですね』と言うとすぐに業者を手配

し、それからわずか三日後に引越しを決行してしまった。

これほど迅速な転居は通常の業者では不可能で、どうやら相当値の張るところに依頼したらしい。柑奈は自分で支払いをするつもりだったが、羽芝は『もう料金の精算は済んでいます』と言い、受け取ってもらえなかった。

あれから二日、彼の自宅で新生活を始めた柑奈だったが、快適の一言だった。リビングをはじめとした共用部はホテルのように整えられ、週に二回家事代行業者が来るものの、それ以外はすべて羽芝が掃除をしているらしい。

朝八時半に車で五分のところにある会社に向かう彼は、出社前に柑奈の朝食と昼食を用意してくれるが、そのクオリティは目を瞠るばかりだった。

ちなみに昨日の朝はベーコンエッグとレーズン入りのキャロットラペ、グリーンサラダとクロックムッシュ、フルーツとコーヒーというメニューだったが、今日は卵焼きと筑前煮、焼いた塩鯖しおさばときのこの生姜煮しょうがに、野菜サラダと具だくさんの味噌汁、炊きたてのご飯という和定食で、お店さんからの出来栄に柑奈はすっかり感心してしまった。

最初に話を持ちかけられたときに「あなたに快適な生活を約束します」って言ってたけど、まさかここまでとは思わなかった。晩ご飯もすごく豪華だったし、日中は羽芝さんはいなくてわたし一人だし、快適すぎて気後れしちゃう。

しかし今の状況を、担当編集者の三門に説明しなければならぬ。

羽芝には編集者と頻繁に打ち合わせがあることはあらかじめ説明しており、自宅内に入れる許可

も取っている。だが、今日が初めての訪問だ。

ふいにトークアップリの着信音が鳴り、スマートフォンを手に取ると、その三門からのメッセージが来ていた。

内容は「転居先の住所を検索すると、高級レジデンスが出てきたが合っているか」という確認で、柑奈は合っている旨を返信する。

かくして午後一時、三門の来訪を告げるインターホンが鳴って、建物入り口のオートロックを解除した。数分後に再度玄関のインターホンの音が響き、柑奈はロックを解除してドアを開ける。

「いらつしゃい」

「……」

そこにいたのは、眼鏡をかけた背の高い男性だった。

年齢は柑奈より五つ年上の三十歳で、細身の体形にチャコールグレーのスーツがよく似合っている。顔立ちは整っており、ともすれば冷たそうに見える切れ長の目元とシャープな輪郭、スタイリッシュにセットした髪が理知的な印象を醸し出していた。彼は柑奈を見下ろして口を開いた。

「お疲れさまです、成沢先生。こちらは俺からの引越し祝いです」

「えっ、ありがとう。うれしい」

三門が紙袋に入った観葉植物を差し出してきて、柑奈は「どこに飾ろうかな」と考える。

（羽芝さん、インテリアにすごくこだわりがありそうだから、勝手にその辺に置いたら迷惑だよね。わたしの部屋に置こう）

そう考えながら「どうぞ、入って」と促すと、彼がふいに声を上げた。

「先に仕事の話をしようかと思っていたが、どうしても気になるからプライベートを優先させてもらう。——お前、こんな高級物件に引っ越すなんて正気か？ 外観に驚いてネットで検索したら、家賃が一五五万円出てきたぞ」

三門が急にぞんざいな口調になったのは、彼が柑奈の担当編集者である以前に幼馴染^{おとななじみ}だからだ。実家が隣同士で、生まれたときからつきあいがある三門は、柑奈にとって兄同然の存在だった。

小学生の頃から絵を描くのが好きで、中学から本格的に漫画を描き始めた柑奈を傍で見守ってきた彼は、描いた作品を読んで「柑奈には才能がある」と断言してくれた。

『いいか、俺は大学卒業後に大手の出版社に入り、漫画の編集者になる。お前はもつと技術を磨いて、自力で賞を取ってデビューしろ。いつか絶対に俺が担当になると約束するから』

その言葉どおり、三門は名門大学を卒業したあと、過酷な求人倍率を勝ち抜いて大手出版社に就職した。

彼は幅広いジャンルへの興味関心があり、漫画のみならず映画やアニメ、文芸作品などにも造詣^{ぞうけい}が深く、企画力がずば抜けている。柑奈がデビューする前にもヒット作を二作担当しており、その作品はアニメ化と実写映画化をしたというから驚きだ。

淡々としてとつきにくい印象のある三門だが、数々の人気作品を手がける敏腕編集者としてSNSや出版社の公式動画チャンネル、メディアに積極的に登場し、その優れた容姿も相まって話題になっている。

そんな彼は柑奈がデビューした一年後から担当編集者となり、『恋じゃないと名前をつけた』という作品をヒットさせた。仕事モードのときはこちらを立てて『成沢先生』と呼び、敬語を使っているが、プライベートになると昔ながらの気安い口調になる。

柑奈のほうも、人前では敬語を使って三門と他人行儀に話すものの、電話や二人だけのときは普通の言葉遣いに戻っていた。

そんな彼はこちらのだらしなさや自宅の汚さを充分わかっているため、突然引っ越したと聞いて驚くのも無理はない。柑奈はリビングに向かって歩きながら説明した。

「ここはある人のおうちで、わたしが近々引っ越す予定だと知ったその人が『じゃあうちに来れば』って言うてくれたの。だから自分で家賃を払ってるわけじゃないし、敷金礼金もかかってない」

リビングのドアを開けると、広すぎる空間を目にした三門が言葉を失う。

その様子を目の当たりにした柑奈は、「無理もない」と考えた。

（都心でこんな物件、普通はびっくりするよね。わたしもまだ慣れないもん）

これまで柑奈が住んでいたのはごく一般的なILDKのマンションで、十二畳のリビングと六畳の寝室は足の踏み場もないほど散らかっていた。

しかしこの三十二畳のリビングルームは、洗練された家具や現代アート、観葉植物が並び、まるでホテルのような雰囲気醸し出している。足を止めた柑奈は振り返り、「それで、あの」と言いよんだ。

（駄目、さらっと言わなきゃ。さんざんシミュレーションしてきたんだから）
そう己を叱咤し、柑奈は精一杯何気ないふうを装って告げる。

「実はわたし、結婚したんだ。急な話で、式とかを挙げる予定もないんだけど」
「……は？」

三門がボカンとした表情でこちらを見つめ、しばらく沈黙する。

どうにか普通の顔を作ろうとして失敗し、柑奈が気まずげに視線を泳がせると、やがて彼が口を開いた。

「ちよつと待て、結婚？ お前、高校のとき以来つきあってる相手はいないんじゃないか」

「ネームをしに通ってた行きつけのカフェで、知り合った人なの。隣に座って会話するようになって、それで」

「でもそんな話、今まで俺に一度もしなかったし、そもそも誰かと頻繁に会ってる感じもなかったよな。出会ってどのくらいなんだ」

「えっと……一カ月」

初めて羽芝と言葉を交わしたのは前回のプロット作業のときのため、正確に言うとも一カ月と二日だ。柑奈がそう答えたところ、三門がみるみる毗を吊り上げる。

「出会って一カ月で結婚を決めるなんて、お前は馬鹿か？ 普通につきあっていたとしても、まだ相手の人となりを充分理解できていない時期だろう」

「それは……」

「今流行りの、実際0日婚ってやつか。そもそもそいつは、どういう素性の人間なんだ」
詰問口調で問い詰められ、柑奈はモソモソと答える。

「えっと……羽芝詠一さんについて、年齢は三十六歳。確かITスタートアップとかエネルギー関連に投資する、ベンチャーキャピタルの社長だと言ってた。起業して七年だって」

「経営者だから、こんなすごい物件に住んでるのか。だが金持ちで柑奈より十一も年上なのに今まで独身だったってことは、性格に問題があるのかもしれない。お前ははっきり言って世間知らずだし、そいつに騙されてるんじゃないのか」

あまりに一方的な言い方に、柑奈はムツとして言い返す。

「別に騙されてなんかない。羽芝さんは穏やかで、いかにも上流階級の人らしい分別がある人だし、人格に問題なんてないから」

「猫を被ってるだけかもしれないだろ？ ろくに交際もせずに結婚するなんて、何か裏があるに決まってる。俺がその真意を確かめてやるから、今すぐそいつに会わせろ」

羽芝が問題のある人物だと決めつけられ、柑奈の中に反発心がこみ上げる。

確かに自分は専門学校生のときに漫画家デビューしたため、一般企業での就業経験はない。世間知らずと言われればそのとおりで、家事能力も低く、三門からすれば頼りなく見えるだろう。

（……でも）

柑奈は既に二十五歳で、立派な大人だ。

自分の力で収入を得ており、実家の援助を受けずに生活しているのだから、子ども扱いするのは

間違っている。そんな思いがこみ上げ、彼を見上げた柑奈は頑なな表情で告げた。

「慎平くんはそうやって子ども扱いするけど、わたしは自分の意思で結婚できるほど大人だし、もう羽芝さんと入籍しちゃったから。そんなふうに一方向的に貶すのはやめて」

「今まで一度も会ったことのない男と結婚したって聞いて、俺が素直に『おめでとう』って言うと思うか？ 常識のある人間ならちゃんと段階を踏んで結婚するはずだけど、その男はシンガポールにいるお前の両親と顔合わせをしたのか」

痛いところをつかれた柑奈はぐつと言葉に詰まったあと、押し殺した声で答える。

「……してない」

するとそれを聞いた三門がますます険しい目つきになり、声に苛立ちをにじませて言う。

「その言葉を聞いて、そいつがとんでもない男だって確信した。結婚するのに相手の親に挨拶をしないなんて、三十六歳の大人がすることじゃない。どういうつもりでお前と結婚したのか俺が直接問い質してやるから、今すぐ羽芝とかいう男をここに呼べ」

「落ち着いて。今は仕事に行ってるんだから、そんなことはできないよ」

「そんなの関係ない。だったらこっちから出向くから、会社の名前を教える」

「いい加減にして。わたしが結婚するのに、どうして慎平くんの許可を得なきゃいけないの？ 担当だからって、プライベートにズカズカ入ってこないで」

その瞬間、彼が目を見開き、柑奈は自身が言いすぎたことを悟る。

三門とはつきあいも長く、家族のような存在で、現在は仕事のパートナーだ。彼がいなければ

きつと柑奈は途中で漫画を描くことに行き詰まり、今の評価は受けていないだろう。

（そうだよ。忙しくなると食べるがおろそかになるわたしのために、慎平くんはまめに差し入れをしてくれたり、栄養ドリンクを買ってきてくれたり、部屋のゴミ出しをしてくれたりしていた。普通の担当編集者以上のことをしてくれるのは、幼馴染だからなのに……わたしは）

じわじわと罪悪感をおぼえた柑奈は、三門に謝罪する。

「あの……言いすぎた、ごめんなさい。慎平くんが羽芝さんのことを怪しいと思うのは、当然だよ。今まで一度も会ったことがないんだし、うちの両親にも挨拶してないって聞いたたら、『常識がない』って判断するのも仕方がないと思う」

すると彼がふーっと深く息をつき、眼鏡の奥の目を揉みながら言う。

「俺も言いすぎた。頭ごなしにガミガミ怒れば、柑奈が反発するのも無理はない。……悪かった」

「……………」

「だが、その男に会わせてほしいという要望は撤回できない。俺はお前の両親から直々に『柑奈をよろしく』と頼まれた、いわば保護者代わりだ。担当編集者として月に何度か打ち合わせでここを訪れるし、家主に挨拶するのは当然だと思う」

三門の言うことはもつともで、柑奈は目を伏せ、「……うん」と頷く。

出会ってわずか一カ月、きちんとした交際期間を経ず、信頼できる人に紹介しないまま入籍してしまったのだから、結婚相手で年上である羽芝を「常識がない」と思うのは当たり前だ。

そう考えた柑奈が気まずい思いでいると、彼が再び口を開く。

「ひとつ確認したいんだが、お前はその男に何か弱みを握られているとか、それが原因で結婚を強要されたとかではないんだな？」

それを聞いた柑奈は驚きに目を見開き、弾かれたように顔を上げて否定した。

「ううん、そんなことはない。羽芝さんはちゃんとしていて、わたしに何かを強要するような人ではないから。今日は無理だけど、慎平ちゃんと彼が会う機会を設けるつもりだし、少し時間をくれる？」

「わかった。——悪いが今日は、これで帰る。邪魔したな」

三門が踵を返して玄関に向かい、柑奈は慌ててそれを追いかけた。

「待って。せっかく来たのに、プロットの打ち合わせは……」

「あとでデータをメールで送ってくれ。必要なら電話するから」

玄関で靴を履いた彼がこちらを振り返り、じつと見つめてくる。

強い眼差しに柑奈が戸惑いながら視線を返すと、三門がボソリと言った。

「突然柑奈から結婚したって聞かされて、俺はだいたい冷静ではないようだ。このまま一緒にいても仕事の話はできそうにないから帰るが、わざわざ時間を作ってくれたのに申し訳なかった」

「えっ」

「お前の『夫』と面会できる日の目途がついたら、すぐに連絡がほしい。——お邪魔しました」

三門が玄関から出ていき、目の前でドアが閉まる。

予想外の反応をされ、柑奈はひどく戸惑っていた。出会ってわずか一カ月で結婚したことを怒ら

れるのは覚悟していたものの、傷ついたような顔をされたのが意外で、どう受け止めていいかわからない。

（あれかな。妹が結婚したら、遠くに行ってしまうようで寂しくなるお兄ちゃんの気持ち。うん、たぶんそれだ）

確かに三門とは学生時代こそ距離が離れたものの、漫画の担当編集者になってからは関係が密になり、仕事のみならずプライベートでも関わるが多かった。

その距離感は兄妹に近いものだったため、彼が「重要なことを相談されなかった」とショックを受けてもおかしくない。

（でもわたしと羽芝さんが契約結婚だって知ったら、慎平くんは「何考えてるんだ」ってますます怒りそう。だったら内緒にしておいたほうがいいよね）

そんなことを考えながら自室に戻った柑奈は、メールで三門にプロットを送る。

一時間ほどすると返信があり、そのまま修正点などをやり取りしてプロットを完成状態まで詰めた。その勢いでネームに着手し、集中して作業するうち、気がつけば午後五時半になっている。肩凝りをおぼえて立ち上がった柑奈は、コーヒーを淹れるためにキッチンに向かった。

すると廊下に出たところで玄関のドアが開き、羽芝が入ってくる。

「あ、おかえりなさい」

「ただいま」

今日の彼はグレーのタートルネックの上に茶色のコードデュロイジャケットを羽織り、黒のスラッ